

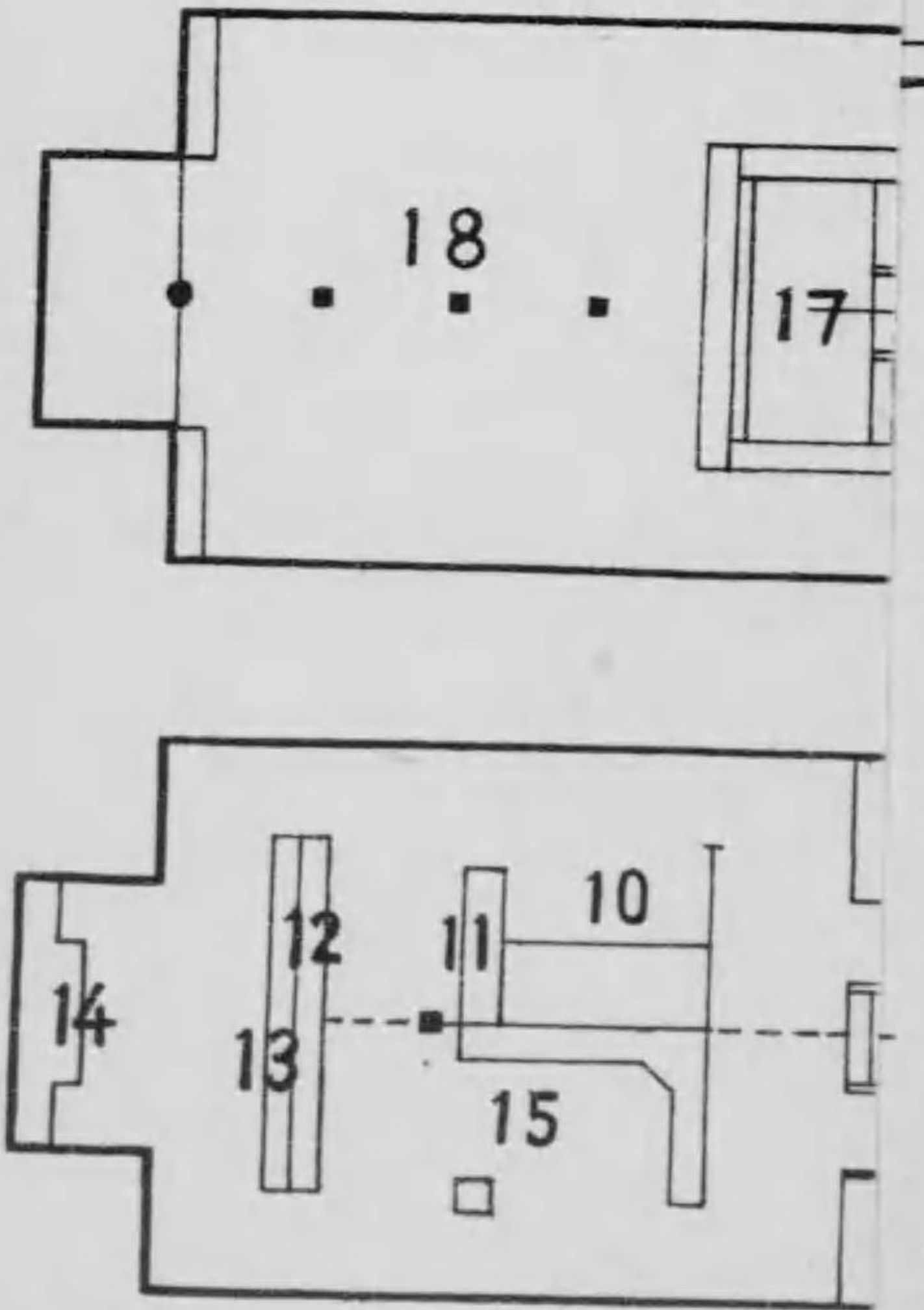
始



日光寶物館陳列目錄

圖面

- 8 御輿
- 9 強飯人形
- 10 家光公遺品及大猷廟献上品
- 11 朝鮮使節將末品及御膳具
- 12 大猷廟及將軍家關係品
- 13 慈眼大師關係品
- 14 維摩其他佛像
- 15 中禪寺本宮新宮
龍尾、寂光奉納品



日光寶物館拜觀心得

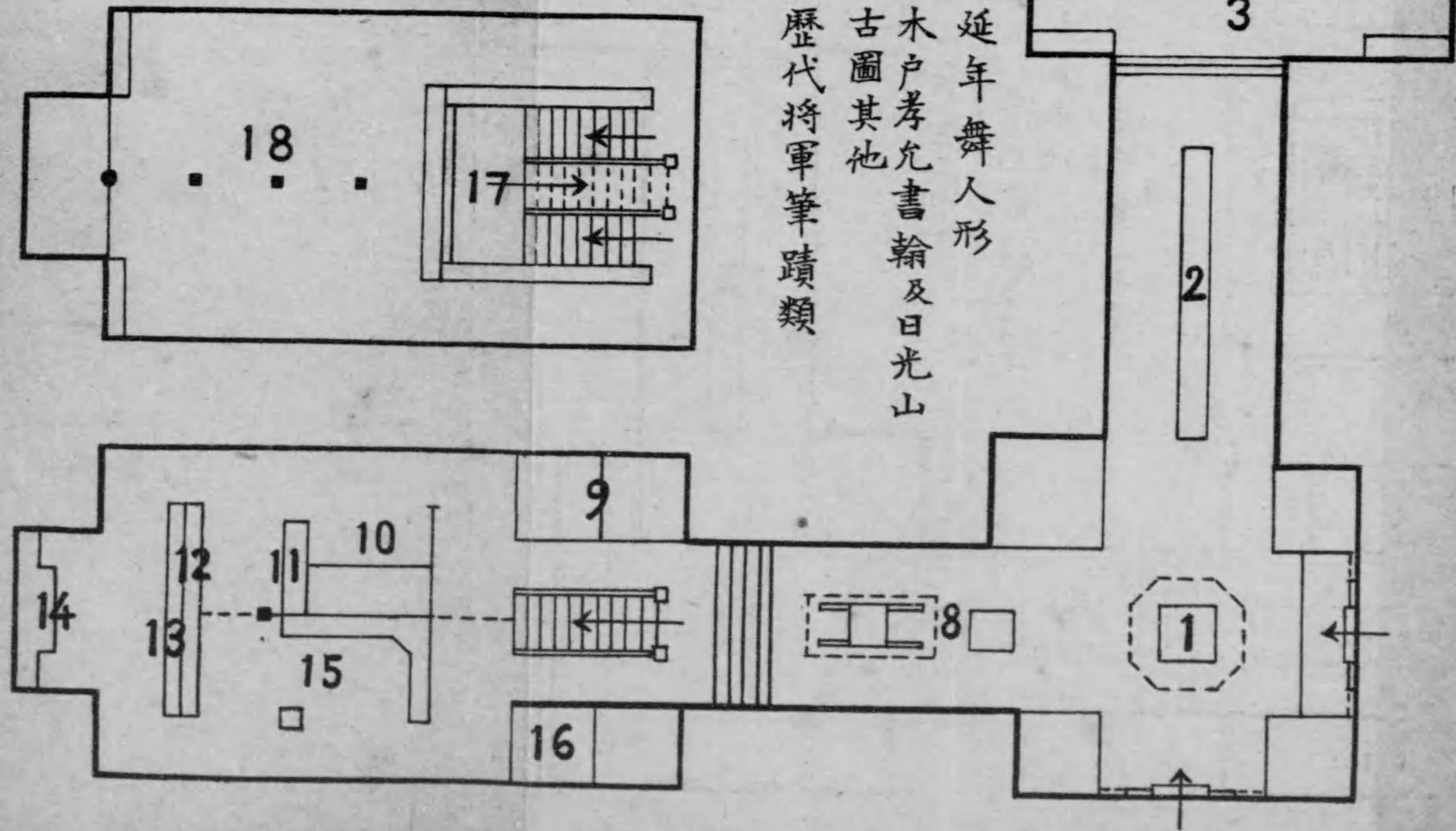
- 一 靜肅に拜觀の事
- 一 寶物壁畫等に手を觸れぬ事
- 一 禁烟の事
- 一 杖傘等を携へぬ事
- 一 許可なくして撮影若しくは模寫せぬ事

日光寶物館

日光寶物館平面圖

- 1 鐵多寶塔
- 2 御祭禮行列具
- 3 舞樂關係品
- 4 御裝束、御寢具
- 5 神器 神寶
- 6 御年忌關係品
- 7 御在世品
- 8 御輿
- 9 強飯人形
- 10 家光公遺品及大猷廟獻上品
- 11 朝鮮使節將末品及御膳具
- 12 大猷廟及將軍家關係品
- 13 慈眼大師關係品
- 14 維摩其他佛像
- 15 中禪寺本宮新宮
龍尾、寂光奉納品

- 16 延年舞人形
- 17 木戶孝允書翰及日光山古圖其他
- 18 歷代將軍筆蹟類



日光寶物館拜觀心得

- 一 靜肅に拜觀の事
- 一 寶物壁畫等に手を觸れぬ事
- 一 禁烟の事
- 一 杖傘等を携へぬ事
- 一 許可なくして撮影若しくは模寫せぬ事

日光寶物館

晃山路史

日光の開基

日光は天然の景と人工の美とを併せ有し、今や日本の名地たるのみならず、また世界の勝地となれるも、もとは深山幽谷人跡も通ぜぬ處なりき、こゝに約一千年のむかし勝道上人といへる聖あり、はじめて百難を排

してこの山に分け入り、今の二荒山神社本宮中禪寺等の基を開きしが、ついで弘法大師瀧尾社を創建して上人の高足道珍に附し、その後叡山の慈覺大師

た當時の主僧昌禪と議して一山を興隆し、堂坊三十有六に及びりといふ。
館第十三區參觀

辨覺の中興

鎌倉時代に入りて辨覺和尚によりて中興せらる。辨覺は學徳の譽世に高く、將軍家を始め宇都宮小山兩氏はいふに及ばず、關東將士の信仰歸依いよく、厚し、さればその助縁を得て荒廢せる社寺多く舊觀に復し、そ

大正
6. 8. 25
内交

273-9
21-245

の寄進物また少からず、日光山誌に載せたる建保四年の銘ある日光山権現の梵鐘は宇都宮政綱の寄進したるものにして、同じく建保六年在銘の中禪寺棟札に左衛門尉藤原朝政とあるは即ち小山氏なり。國寶安貞二年在銘時繪手宮の寄進者平助永も當時の豪族たり。

辨覺以後の日光

辨覺の中興後當山に對する信仰は益々盛なりき、今二荒山神社の境内にありて俗に化燈籠と稱する國寶銅燈籠の寄進者鹿沼入道教阿の如き明治卅五年の洪水に流失せし應永廿三年在銘の中禪寺湯釜の寄進者上州佐貫庄藤原道慶の如き、今板挽町淨光寺所藏の本宮推鐘を寄進せる古戸道光氏吉の如き又享祿三年在銘手宮の寄進者齋藤元家の如き何れも皆當山に歸敬せし將士にあらざるはなし。而して室町時代の末に至るまで本宮、新宮瀧尾中禪寺及び寂光(若王子)等の殊に信仰せられたること寄進物の銘に此等社寺の名多く存するによりて推知すべし。(東館第十三區參觀)

東照宮の鎮座

江戸時代に入りて慶長十八年天海大僧正慈眼大師はじめて當山を管せり。元和二年四月十七日神君駿府に薨するや、遺命によりて先づ久能山に葬り、やがて當山に社殿を建築せしが、翌三年二月東照大權現の神號を賜はり、三月社殿の工事竣るによつて四月當山に改葬せり。その御墓を奥の社といふ。東廊第八區に陳列せる御輿は、この時靈柩を載たるものなりと傳へらる、又社殿の側に一字を建立して大樂院と號し、東照宮の別當とせり。(南館第四區第五區及び第六區第七區參觀)

東照宮の改造と輪王寺

この後七年を経て寛永元年に至り東照宮改造の工を起し、が同じく十三年竣工し輪免の美大に整ひき、後幾たびか修繕を加へられしも、その規模舊の如し、今の廟宇是れなり。同じく十五年天海大僧正の奏によりて、後水尾天皇第三の皇子守澄法親王日光山門主に任ぜられ給ひ、正保四年關東に下り、承應三年職を受けて輪王寺の宮と稱せられぬ實に

輪王寺門跡第一代たり。その後十二代にして公現法親王(北白川宮能久親王)に至り世は明治の維新となり法親王門跡のこと止みぬ。今輪王寺に當山古來の佛具等を傳ふるは其創建以後一山を總管せしに由るなり。

大猷廟と慈眼堂

寛永二十年十月二日天海大僧正遷化せしかば山内字

大黒山(後稱御堂山の傍)に葬り拜殿及び影堂を建立し慈眼堂と稱す。ついで慶安四年四月二十日三代將軍家光薨するや初め東叡山に葬り遺言によりて後また東照宮と同じく當山に改葬し慈眼堂に近く莊麗なる廟宇を建立せり。大猷廟是なり。東照宮と共に江戸時代初期に於て他に觀るべからざる建築美を發揮せるものとす。(東館第十區第十一區參觀)

勝道上人の開基以來一に一千餘年時に盛衰なきにあらずと雖も實に關東に於ける靈場たるのみならず東照宮大猷廟の建立せられてより將軍宗廟の地として全國の歸敬するところとなり年中行事の莊嚴なる他に多く其類を

見す。その祭式に舞樂を行ふ如き當時關東の社寺たゞ當山ありしのみにして強飯式(東館第九區)及び延年舞(同第十六區)の如きは今日猶祭禮行事の一として當山に存するものに係る。明治四年神佛分離の後東照宮二荒山神社輪王寺の二社一寺となりて現今に及べるも上に述ぶるが如く一山の歴史は互に密接なる關係ありその寶物はこれを一館に陳列し始めて意義を有するものなり。是れ東照宮三百年大祭に際し本館の newly 建てられたる所以にして本館に保存陳列せる幾多の寶物は一面に於て一千餘年の歴史美術の集積たると同時にまた一面に於て我が國民の信仰崇敬の結晶と稱すべき也。

日光山國寶目錄

繪畫

東照宮御緣起 狩野探幽筆

五卷 東照宮

彫刻

木造千手觀音立像 中禪寺立木觀音堂安置

一軀 輪王寺

書蹟

紺紙金泥阿彌陀經 櫻町天皇宸筆

一卷 輪王寺

紙本墨書日光山瀧尾建立草創日記

一卷 同

紺紙金泥般若心經 足利滿兼筆

一卷 同

刀劍

遠近作太刀 銘遠近

一口 二荒山神社

長船倫光作太刀	銘備州長船倫光 貞治五年二月日	一口同
備前兼重作太刀	銘備州住兼重作	一口同
豐後行平作太刀	銘寛正三年十二月日	一口同
來國俊作太刀	銘來國(以下一字不明)	一口同
革柄臙色鞘刀	銘助眞	一口東照宮
絲卷太刀	福岡一文字	一口同
絲卷太刀	備前三郎國宗	一口同
絞柄短刀	行光作	一口同
太刀	銘吉房 拵絲卷太刀	一口同
劍	銘久國弘安三年三月日 拵金銅造太田備中守資宗寄進	一口同
太刀	無銘傳行平 刀身ニ寛正六年五月綱俊施入ノ切付銘アリ	一口輪王寺
美術		

(二)

住の江蒔繪硯筥

蒔繪手筥

錫杖 銘願主秀海

金石文

二荒山神社新宮銅燈籠 正應五年在銘

鐵多寶塔 文明二天在銘

銅碗 延元元年在銘

一合輪王寺
一合同
一柄同
一基二荒山神社
一基輪王寺
一口同

(三)

日光寶物館陳列目錄

※臨時陳列 ①二荒山神社所藏
②東照宮所藏 ③輪王寺所藏

○注意 本目錄中に何年前とあるは大正六年より起算せるものとす。

第一區

1 國寶鐵多寶塔 總高八尺四寸

瀧尾の境内に立てられたるもの鐵塔中稀觀の品なり今屏並九輪寶珠を失ひ又組物鑄出缺損せるもの多し。

(銘) 「文明二年 四百四十八年前」

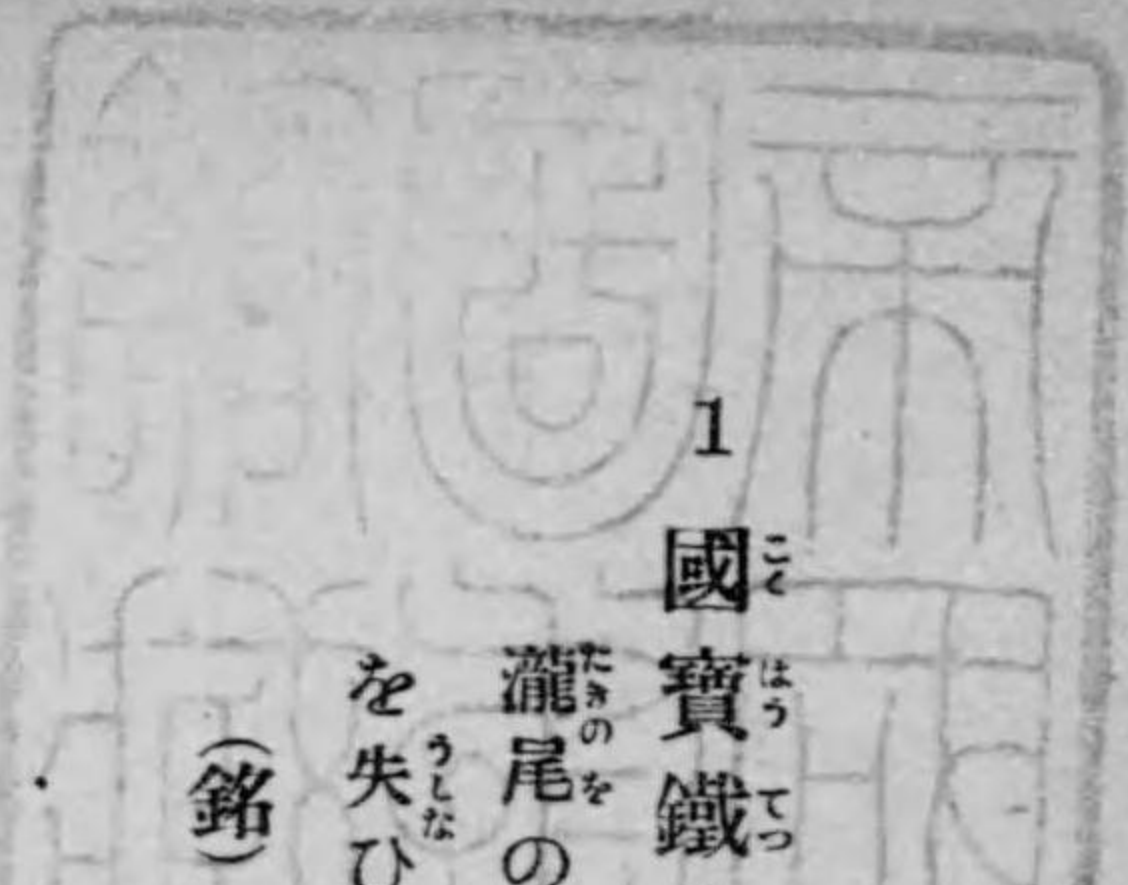
奉新造 文明二年

瀧尾山 甲寅三月十五日

鐵塔 大工 宇都

光明院 宮住人

法印昌宣 大和太郎



願主
文月坊宗弘

第二區

東照宮の御祭禮行列に關するものを陳列す。

2 東照宮御祭禮行列具

玉鉦十、獅子頭二、鐵砲十、弓十、長柄鎗十、具足二、翳二、
毎年六月二日明治九年前は陰曆四月十七日の大祭及び九月十七日の
中祭に行はるゝ御祭禮行列に用ふるものゝ一部俗に百物揃行列と稱
す宜しく壁畫を參照すべし壁畫は和田英作氏維新前の様を描寫せし
ものなり。

(二)

第三區

東照宮及び大猷廟に行はれし舞樂關係品を陳列す。

3 大太鼓

銅彩色徑約三尺三寸
一に鼉太鼓とも書く。

4 大鉦鼓

鉦唐銅製 高三尺
左右各々一對宛あり今其壹個づつを陳列す左右の相違は粹裝飾の彫
刻、一は龍にして一は鳳凰とす共に寛永年間の製作に係る。

5 蘭陵王裝束

左舞
面、年子、袍、襦袢、袴、桴、金帶、
一人舞、一名没日還午樂と云ふ齊の蘭陵王長恭其の威嚴を飾らんが爲

(三)

にこの態をなせしに像り作れるものと云ふ。

6 納曾利装束 右舞

面、袍、襦、袴、袴、桴、銀帶、

二人舞、一名雙龍舞とも云ふ、舞者一人なる時は落蹲と稱す。

7 青海波装束 左舞

兜、袍、下着、平緒、太刀、

青海波は天竺樂にして四人舞なり。或は龍宮樂とも稱す。

8 貴徳樂装束 右舞

兜、襦、袴、袴、太刀、

貴徳は高麗傳來樂にして一人舞なり。

9 一鼓

10 二鼓

11 三鼓

12 羯鼓

13 鞞鼓

14 鷄婁鼓

15 鼗

16 和琴

9より16に至るまで、また皆舞樂に用ゐらるゝものなり。
寛永年間の製。

17 敵

樂の始めを告ぐるに用ゆる具。

18 祝しゆく

樂の終りを告ぐるに用ゆる具。

第四區

東照宮男女兩體の御装束及び御寢具並に神君御所用の御輿類を奉安す。

19 男體御装束

袍、半臂、大帷、單、下襲、裾上、裾、表袴、大口、襪、御冠、御笏、御石帶、御沓、男體の分は、主神左右神の三種あり、衣紋によりてこれを分つこゝに奉

安せるは即ち左右神分の一なり。

20 女體御装束

御唐衣、御表衣、御打衣、御單、大腰引腰、紅袴、御裳、襪、和扇、俗に云ふ十二單の御装束なり。男女兩體御装束及び其附屬品收藏の唐櫃箱は蒔繪の粹を鍾め何れも其底面に銘文あり装束類は山科家の調進にして唐櫃その他は出納内藏權頭中原職厚の調進せるところ文化年度の製作に係る。

21 御小袖

表白綾牡丹唐草浮紋橘紋金糸縫裏白精子金梨子地橘紋蒔繪の唐櫃に納む。共に文化年度出納内藏權頭中原職厚の調進に係るものなり。

22 御寝具^⑧

御宿衣、御蒲團、御單衣、龍鬢御筵、御枕、

御宿衣以下唐櫃共慶應二年深秘職小山虎次郎の調進に係る。

23 網代輿^⑧ 高三尺八寸、幅二尺七寸

御在世品の一大阪の陣に眞田幸村が狙撃せりといへる一銃丸の貫通せし孔を存せり梨子地に蒔繪にて葵及酸漿の紋章を描きたり。

24 東照宮大権現勅題^⑧ 巾長三尺五寸、巾二尺四寸

唐戸構表正面に掲ぐ籠字彫一説後陽成天皇宸筆といへど現陽明門に掲ぐるものと相違なきを以て同じく後水尾天皇の宸筆と思はる。

25 渾天儀^⑧ 銅製 高一尺二寸三分

天體の運行星座の異動等を測量する器、臺座に溝の設けあるは水を盛りて水平を保つのであるが爲なり。

26 渾天儀^⑧ 高五尺

傳來不詳昔東照宮に奉納せられたるもの七寶金象嵌の美を盡せる點注意せらるべし。

第五區

27 茶辨當^⑧

東照宮の神殿を模し神饌具を配置してその一斑を示し神寶及び神器を奉安し東照宮縁起を陳列す。

黒漆、鍍金々具付、風爐、茶碗、唐瓶銀製、舊時、三品立用、

風爐は文化十一年堀田相模守正愛の奉納にして唐瓶は享和元年十二月掛川城主源資愛の奉納にかゝる。

28 御機道具

箆一、絡塚利一、麻桶一、栳二、杼二、鐺一、續車一、以上金梨子地花鳥高蒔繪に納む何れも慶應二年深秘職小山虎次郎の調進にかゝる。

29 御雙子宮

宮金地花鳥高蒔繪納品銀耳搔二、鍍銀鉢一、鍍銀毛拔二、鍍銀小刀二、

30 御雙子宮

宮金地草花高蒔繪納品小角赤宮一、黄楊三日月形櫛四、鬘結緒二、

銀筭二、櫛拂二、

31 大工道具

金梨子地蒔繪箱に納む墨壺一、曲尺二、鐵製鍍金鉏一、東照宮寛永の棟上式に用ゐるものにして、大棟梁甲良宗廣の奉納にかゝる。

(箱蓋裏銘) 「寛永十三年 二百八十二年前」

御造畢成就所

奉納 征夷大將軍源朝臣家光公御建立 大僧正天海大和尚 御導師
東照大権現御寶殿 于時寛永十三年丙子四月八日 甲良豊後守藤原朝臣宗廣

32 矩術新書

幕府大工大棟梁平内大隅の編著なり。本書中著者の最も力を致した

るは幅棧起原儀發明の條項とす、嘉永四年同人より奉納せしものにか
かる。

(卷首)

四天王寺流正流

平内大隅延臣編

(卷末)

官大棟梁

嘉永元年戊申春三月刻成梅坪社藏

〔箱蓋銘〕 嘉永四年
六十七年前

奉獻 東照宮御寶前

矩術新書一部

嘉永四年辛亥四月吉日大棟梁十代目平内大隅延臣

33 三十六歌仙扁額 三十六面ノ内

置上彩色もと東照宮拜殿長押に掲げられしものにして畫は土佐光起
の筆と傳へらる今掲げあるものはこの寫と云ふ。

34 楯 ④

明治四十三年東照宮正遷宮の節用ゐられたるものなり。

35 梵字御鏡 ④ 徑九寸

白銅製八葉背面彌陀觀音勢至の種字の梵字鑄出この御鏡は文化十一
年五月東照宮正遷宮の御用の爲め京都鏡師青家の調進にかゝる然る
に背面鈕なきたため御用に立ち兼ねるの故を以て銅の御庫に納置られ
たるものなり。

36 置燈籠 ④

二組、一は銅製鍍金、一は銅製共に龜甲模様透に葵紋章を附す。

37 菊燈臺 ④ 高四尺三寸

金梨子地金銀蓮辨蒔繪下敷六花形鍍金々具の覆輪。

38 青銅鶴香爐 ④ 高四尺九寸

肥下に「蒲陽漆伯紹造」の鑄銘あり寛永十七年太田備中守の奉納にかゝる。

(銘) 「寛永十七年二百七十八年前」

奉獻

日光山

東照大権現 御靈前

常誦蓮筆 鶴來繞聽

爐煙日照 明德惟馨

寛永十七年四月十七日

太田備中守 源 資 宗

39 青銅鶴香爐 ④ 高四尺九寸

慶安三年有馬忠頼の奉納にかゝる。

(銘) 「慶安三年二百五十九年前」

日光山

東照大権現宮寶前

千年玄翻 一穂黄雲

香在靈徳 郁々芳々

慶安三年四月十七日

40 國寶東照宮緣起 ④ 五卷

東照神君御誕生より當山の鎮座に至る迄一代の御事蹟を描きたるものにして狩野探幽が畢生の力を究めたる大作なり詞書第一及び第十八は共に後水尾上皇の宸筆其の他の二十三章は王公の筆に係るものなり。

41 東照宮緣起 ④ 五卷

文化十一年百四「年」前に住吉廣定板谷廣長同廣隆同廣壽等が住吉如慶筆縁起を模寫せるものにして詞書は成島司直の筆なり。

42 御甲冑

東照神君關ヶ原の御陣に用ゐ給ひしものと傳へらる兜胸當胸は共に當時外國よりの舶來品なり餘の附屬品は我邦の製作にかゝる徳川御實記に南蠻より舶來の鳩胸の鎧に椎形兜とあるは正に此種の甲冑を指す。

43 將軍家奉納太刀

何れも糸卷太刀にして將軍家並に三家三卿より奉納せられしものゝ一部新刀なれども時々の名匠の作になれるものなり。

44 兜立 高一尺二寸二分

金梨子地に松橋葵紋散切金蒔繪の美の粹を鍾めたるものなり。

45 越前康繼作刀 又長一尺二寸二分

寛永五年四月十七日南蠻鐵を以て作る明治卅八年四月十七日武藏萩原空衛氏の奉納にかゝる。

(銘表) 「寛永五年 二百八十八年前」

奉寄進東照大權現

(裏) 以南蠻鐵於武州江戸作之同國喜内彫之

寛永五年四月十七日

越前康繼

46 國寶久國作劍

拵總金具鍍金龍形の毛彫七寶飾玉付慶安元年四月十七日太田資宗の奉納にかゝる。

(銘表) 久國

(裏) 奉納日光山東照宮靈前

弘安三年三月 日
慶安元年四月十七日

太田備中守 源 資 宗

青銅花瓶及香爐

寛永二十年琉球國王の奉納にかゝるもの何れも支那製品にして共に
舊銘を削りたる痕跡を止む而して各々慶長十四年島津家久家臣平田
太郎左衛門平英宗追討の節之を求め得て福昌寺に寄進せし旨の墨書
あり。

花瓶 高三尺八寸
腹徑一尺八寸

一銘 「寛永七十年前」

琉球國中山王尙賢

奉納

東照大權現廟前

銘曰

靈神威德 永固

洪基

寶緝資福 銘刻愧辭

二銘

花飾瓔珞 葉染瓊璃
諸天下降 瞻仰獻之
寛永貳拾歲在癸未孤夏日

琉球國中山王尙賢憑于

薩州大守拾遺源光久遣

臣尙氏金武朝貞於

日光山齋黃銅華緝壹對

黃銅香爐壹個奉納

東照大權現廟前仍爲之銘

式表丹誠仰冀

昭鑑

其辭曰

莊嚴刹土 八面玲瓏

儼然

邊烈 鎮護日東

茲奉法器式陳
閣宮
群花潤色 水在餅中
寛永貳拾歳在癸未孟夏日
香爐 高三尺
腹徑二尺四寸

第六區

主として東照宮御年忌に關せるもの及び御在世品を陳列す。

48 象牙^{ゾウキバ} 長七尺五寸

亞弗利加象の牙蘭人の將來品か傳來不明。

49 諷誦^{フウジュ} 長三尺一寸六分
巾一尺四寸一分

紙質鳥の子にして表金銀泥を以て松竹萩等を描く裏無地金。

(奥書)

慶安元年四月十七日 弟子征夷大將軍 從一位源朝臣家光 敬白

50 願文^{ガンモン} 長四尺三寸四分
巾一尺四寸一分

紙質鳥の子表金銀泥を以て山水草木を描く裏金箔市松模様。

(奥書)

慶安元年四月十七日 弟子征夷大將軍 從一位源朝臣家光 敬白

51 咒願^{ジュガン} 長五尺一寸五分
巾一尺四寸一分

紙質鳥の子裏金切箔表願文に同じ。

(奥書)

慶安元年四月十七日

52 口宣案^{クシケン}

元和二年三月十七日從一位太政大臣に任ぜられたる時の分なり。

53 太政官符

慶安元年三月五日付同符附屬宣命壹通添。

54 位記

元和三年三月九日東照社正一位に昇叙の時の分なり。

55 梨子地葵御紋蒔繪筥

東照宮に於て口宣案官符位記等を收納用に供せられたるもの金具七寶細工の美を盡せる點特に注意せらるべし。

56 接僧筥

金具鍍金七寶昔時御宮東照宮法會のとき法親王の御使用あらせられたるものなり鍍金柄香爐一柄附屬す。

57 草座

錦裂を以て作り邊縁に糸を垂る常に二つに折りて接僧筥に收む大法會に當り導師禮盤に登るに際して侍僧之を展べて座に敷くべきものなり。表に裏菊の御紋章の繡刺あるはもと法親王の御使用に係るを以てなり。

58 後水尾天皇宸筆般若心經

寛永五年九年前東照宮十三回忌に御書寫贈進あらせられたる紺紙金泥經なり。

59 後水尾天皇御製和歌

鳥の子紙表金銀箔にて雲形の置繪58般若心經の包紙に宸筆を染めさせ給ひしものなり。

(御製)

ほととぎすなくはむかしのとばかりや
けふのみのりをそらにとふら舞

あつさゆみやしまの波におさめをきて
いまはたおなし世をまもるらん

60 法華二十八品和歌帖 折木、表紙紺地牡丹及葵紋箱形模倣金襴 縦一尺三寸五分、横三寸四分、柳箱形金梨子地箱に納む

表題織出見返葦手書、また東照宮十三回忌に當り、法華經二十八品の要文を題して後水尾天皇以下王公より贈進せるものなり。

61 後水尾天皇玉襪の御和歌 横一尺七寸三分

鳥の子紙東照宮三十三回忌「慶安元年二月六十九年前」の法會に當り下し賜へるものなり。

〔登有勢字能美屋散無志有佐牟久者伊幾遠冬不羅婦字多〕

の廿四字を六字づつ方形に右轉に排置し其中に也久之婦津の五字五行に排置し周圍縱横及び斜形十字に字を配し句を連ねて和歌を成す。襪紙の包紙に慶安元年卯月十六日御製之内は酒井讃岐守も見不申候

62 禁裡御贈經

とあり。

此種の經文東照宮大猷廟年忌毎に禁裡より贈進あり、主上を初め奉り、王公廷臣の筆に成るこの經東照宮百五十回忌「明和二年百」に當り贈進せられしもの紺紙金泥裏は雲霞に蓮池の模様、袷装は大和錦、外題は金文字、每卷織出見返、每卷其經意を顯はしたる金泥の密書、軸は水晶之を葵紋章に唐草の籠彫ある鍍金金具にて裏み別に同装の筆者目録を添ふ。凡三十二軸。

内宮臺附總長一尺三寸五分、縦一尺一寸五分、横八寸八分三重にして金梨子地高蒔繪圖は天地と象り下方は山海に花鳥上方は濃淡の雲蓋中央共に日章を金泥にて蒔上蓋裏は中央に輪寶を截金にて置き之に葵紋章を繞らして九曜狀をなせり箱内は葵紋の金襴にて貼る臺底面に

(銘)

御經井御宮院承仕兼御經藏

法橋道泉調進

外宮黒柿製、總高一尺八寸五分、竪一尺四寸、横一尺二寸、被せ蓋金梨子地に葵紋及唐草の高蒔繪上面には金泥にて經題及軸數を記せり。

63 殺生禁斷令

64 天下大赦令

檀紙に書す、共に元和三年九月十四日、東照宮本地薬師堂供養のため五畿七道に下されしもの、一部なり。

第七區

主として御在世品及東照宮奉納品の一部を陳列す。

65 編鐘

銅製十六個、寛永十三年四月十七日板倉重宗の奉納にかゝる。
(銘)

奉寄進編鐘十六

日光山東照大権現御寶前

寛永十三年四月十七日

從四位下行待從兼周防守 源朝臣重宗

鍛冶工

手作之

難波津

一處士澤氏衛影

冶工

藤原正良

66 羽織

御在世品の一小紋羽二重、宮本小一氏の奉納にかゝる。

67 熊時計

御在世品の一、また一名狸時計とも云ふ。文化年度銅御庫の災にかゝりし時破損したりと云ふ。前面に出しある機械は其腹中に納めありしものなり。

68 小刀^コ 一長八寸五分 金象嵌の飾あり

御在世品の一、カップリと稱す和蘭よりの輸入品なるべし。文化年度の災に拵の全部を失へり。

69 乳棒^ニ 陶製長六寸五分

御在世品の一、また和蘭よりの渡來品なるべし。

70 鐵砲金具^テ

御在世品の一短銃の銃身及引金。これ又文化年度の火災に破損せるもの同じく和蘭よりの輸入品なるべし。

71 硯^ズ 横二寸七分

御在世品の一粘板岩製。

72 玉柏葉形石^タ 長七寸

御在世品の一粘板岩自然石葉脈の部分珪石。

73 腰屏風^コ

御在世品の一二曲外蕃入貢唐人物彩畫。

74 大皮鼓^オ

吉勝の作昔時東照宮に奉納せられたるもの。

75 硯^ズ 横八寸 縦一尺二寸

粘板岩製寛文六年十年前酒井若狭守忠直の奉納にかゝる。

(銘)

(表) 紫潭祥雲

(裏)

先考若狹少將兼讚岐守源忠勝竭勤勞蒙
洪恩賜若狹壹國暨數郡余襲封其國實

官家厚惠先考餘慶也若州土地膏

腴所產數品就中紫色之石特鮮

明堅緻方今命工雕刻爲硯而奉納

日光山東照宮夫硯壽者也永傳千年祝

國家繁榮也弘文館林子自先考相

識故請之記其事

寛文六年丙午夏日

若狹國主從四品修理大夫源姓酒井氏忠直

第八區

御輿及法親王乘御の御輿を陳列す。

76 御輿 高五六尺七寸 巾四尺二寸

東照神君の靈柩を久能山より移し奉れる時のもの屋形は錦裂張輿は
黒漆螺鈿蒔繪葵及武田菱の紋章を附す俗に御案臺と稱す。

77 手輿 長柄共長一丈二尺八寸三分
總高四尺二寸

黒漆金具鍍金格天井維新前法親王の乘御せられたるものなり。

第九區

78 強飯式

この式は明治維新に至るまで當山に於て行ひしものにして世に日光
責と云ふ社參の諸大名並御目見以上の諸役人請うて之を受く黒漆の
椀にこはめしを山盛にし生大根、唐辛木辛皮蓼等の副食物を副へたり。

椀を頭上にさゝけさせ強飯僧豪壯峻烈なる語調を以て強飯の由来を語り東照神君より賜はる御供なれば受者平身低頭して受けざるべからざるを述べ、こゝには強飯式の最後毘沙門天の金甲を授けらるゝところを示す。

此人形附屬の道具類は多く舊時使用の分を用ひたるものにして、人形は安本龜八の製作に係るものなり。

79 青銅花瓶 高二尺二分 腹徑一尺

承應二年「二百六十年前」琉球國王の奉納品にかゝる。

(銘)

琉球國中山王尙質憑于薩州大守羽林源光久遣臣馬氏國頭正則於日光山奉納于大猷院殿廟前 承應二歲癸巳十月日

80 青銅船形釣花生 長二尺八寸

(銘) 慶安四年「二百六十年前」

奉備大釣船 日光山大猷院殿正一位源大相國御廟前 慶安第四解稔十一月二十日 從四位上行羽林兼周防守源朝臣重宗 佛具屋 太田甚左衛門作

81 青銅釣燈籠 方一尺三寸

三味線胴形格子に唐草の透し彫。中央に獅子の彫刻あり承應二年「二百六十年前」四月北條氏長の奉納にかゝる。

(銘)

今度爲御堂造營奉行、故爲奉報冥福豫奉献上之處承應二年三月晦日被叙從五位下安房守可謂大幸也 奉献上御銅燈籠日光山大猷院殿下之御供所 承應二四月二十日平姓北條氏新藏氏長、佛具屋彦三郎作之

第十區

主として大猷廟に獻上の品及び家光公遺品等を陳列す。

82 大猷院 三代家光將軍自畫贊 紙本、掛物

(贊)

さくやいかにはのそらなる風たにも

松におとするならひありとは

83 守澄法親王御筆大猷院謚號 掛物

法親王は後水尾天皇第三の皇子承應三年御受職輪王寺第一代門跡宮にあらせらる。

大猷院殿贈正一位大相國尊儀

84 一角 長三尺八寸 根元徑一寸四分五厘 重量三百七十匁

和蘭よりの獻上品洋名ウニコールと稱す昔時一角丸と稱する下熱劑は此の角を以て作れる貴重なる藥品なり。

(箱書)

此一長角阿蘭國所獻也因爲希物奉納日光御寶藏

85 花瓶 高一尺二寸 腹徑四寸二分

綠磁松平信綱の獻上せるものにかゝる。

86 海松 長二尺四寸 太き所四寸

延寶二年相模三浦沖にて採取し幕府に獻上せしものを後ち大猷廟の寶庫に收めしものなり。

87 白玉 徑四寸

所謂醉答(ヘイサラバサラ)是なり延寶年間江戸淺草川の上流に於て發見せられ將軍の御覽に供したるものにして後ち大猷廟寶庫に納められしものなり。

88 寶玉宮 高益共八寸 長一尺
巾六寸五分

殿堂に象り作られたるもの、銀金具人物模様、打出四周の硝子板には、裸體人物の模様化せられたるもの、彫刻あり、底面には唐草模様、彫刻の金具に紅緑の玉石を嵌入す、伊太利藝術復興期の作品にして和蘭人の献上品、腕輪頸飾等の貴重品を入れ置く筈なり。

89 五百羅漢彫刻念珠

木實製小玉すべて一百八個、珠ごとに羅漢四五人づつを彫刻す、母珠二個は紫硝子、四個は茶色の琥珀、延寶三年「二百四十四」四月二十日、稻葉正則の奉納にかゝる。

90 蟲眼鏡 鏡面硝子玉 徑四寸五分

和蘭人の献上品なるべし。

91 黒水晶 徑三寸二分

寛文十一年五月、稻葉美濃守正則の奉納にかゝる。

92 黒水晶 高一尺一寸八分

六角結晶の儘

93 香合 高四寸二分 徑四寸二分

銀製

94 獅子丸香爐 總高四寸二分 徑二寸九分

青銅製、朽木民部少輔の奉納にかゝる。

95 蠟石製人形 高六寸六分

胡人立像、寛文十一年四月、稻葉美濃守正則の奉納にかゝる。

96 枝珊瑚

珊瑚礁に付着の儘

97 青銅爵形香爐

98 竹刀 (一)長二尺三寸 (二)長二尺

家光公幼時所用のものと傳へらる。

99 御掛物竿 長三尺九寸二分

肥前國こさん竹製

第十一區

主として明暦元年朝鮮使節の齋らしたる遺品並に大猷廟進供の御膳具を陳列す。

100 朝鮮國王李滉書額字 横六尺 縦二尺三寸

明暦元年「二百六十」四月朝鮮使節の齋したるもの「靈山法界崇孝淨院」の八大字を書す。袷装白地金欄菊花模様七寶鍍金軸朱塗金銀泥畫の筥に納めらる。

101 朝鮮國王祭文 横四尺六寸六分 縦一尺六寸

同じく明暦元年四月朝鮮使節の齋したるもの、朱塗金銀泥畫の筥に納めらる。

102 朝鮮錦 (一)長一丈二尺三寸五分 巾二尺二寸五分 (二)長一丈二尺三寸五分 巾二尺二寸五分

一は赤地丸龍雲形紋二は赤地牡丹唐草紋、また朝鮮使節の齋せるものなり、黒漆鍍金々具付筥に納めらる。

103 本膳

掛盤附屬椀類拾壹個添。

104 二之膳

掛盤附屬椀類拾貳個添。

105 三之膳

掛盤附屬椀類七個添。

103 以下何れも銀覆輪金梨子地唐草模様高蒔繪葵紋散。

106 飯斗 高六寸五分 徑七寸五分

107 汁桶 高八寸 徑八寸

共に金梨子地唐草模様高蒔繪葵紋散。

108 重箱 高一尺四寸五分 横一尺一寸

金梨子地菊折枝模様高蒔繪葵紋散。

109 三方 高一尺一寸

黒漆牡丹唐草模様金蒔繪葵紋散。

110 爛鍋 高七寸五分 徑七寸五分

鍍金葵紋付。

111 錫製茶碗及茶托

112 青銅水指 高二尺

寶珠形

113 青銅水指 高一尺一寸 徑一尺一寸

承應二年五月前「二百六十」四月廿日船越永景の奉納品にかゝる。

(銘)

今度爲御堂造營奉行故爲奉報冥福豫御釜水指奉獻之處承
應二年三月晦日被叙從五位下伊豫守可謂大幸也
奉獻上水指 日光山大猷院殿下御供所承應二年四月廿日
船越三郎四郎藤原永景 佛具屋彦三郎作之

114 青銅獅子香爐 高一尺六寸

慶安四年六月十一日板倉重宗の大猷廟に奉納せしものに係る。

(銘)

奉備獅子大香爐下野國日光山大猷院殿正一位源大相國御
廟前 慶安第四卯稔十一月二十日
從四位上行羽林兼周防守源朝臣重宗治工洛陽三條淨味子
三知

第十二區

115 狩野探幽筆三幅對 掛物

主として大猷廟關係品及將軍家に關するものを陳列す。
絹本墨畫左右山水中文殊

116 茶辨當

箱墨漆朱にて葵紋を描く湯沸銅製。

117 布施壺

木製金箔押。

118 布施壺

銅製鍍金。

119 十軸經臺 總高一尺四寸 長二尺九寸

共に元和年間の奉納にかゝる。

金梨子地輪鉢及癸紋時給久世大和守の奉納にかゝる。

120 法華八講用法具

木製金箔押薪菜摘籃汲水桶等舊時御靈屋に於て法華八講式の時用ゐられたるものなり。

121 字指

長九寸
上下牙製中央木製

122 箸

長八寸
柳製

123 筆

長九寸五分
鞘及軸陶製

共に文恭院十一代家齊將軍の用ゐられしもの。

124 廣蓋

金銀切金の蒔繪美術の粹を鍾めたるものなり。

125 時計

角形高臺共一尺四寸五分
鐘白銅製機械其他周圍鐵製示針板に十二支の文字を漆書しあり。

126 雲山茶壺

陶器高一尺三寸
徑一尺

127 八代茶壺

陶器高一尺三寸
徑一尺
共に昔時幕府より献上茶を入れられたるものなるべし。

第十三區

慈眼大師天海大僧正の遺品類を陳列す大僧正は日光山中興の祖に

して東照神君並に三代將軍の歸依厚く神君の靈廟を日光に建つるに最も力ありし人なり。

128 千手觀音畫像 掛物 總長五尺四寸二分 總巾一尺七寸五分

絹本金泥密畫もと武田信玄天集隆と號し秘藏せしもの寛永十九年天海大僧正より東照宮に奉納せられしものなり。

(裝背墨書)

寛永十九年三月二日日光御祭禮相當折節自然取出依之累年

奉納神宮靈寶者也

山門三院執行探題前毘沙門堂門跡當山座主住寺砌爲後代而已

天海花押

是武田號天集隆秘藏而渡予年尙願二世安樂將軍家光公并

若君竹千

東將 兩入ニ渡畢

武運長久壽命長違給急々如律合

129 聖觀音木像 高約三寸

天海大僧正の護持佛なり。

130 降魔大師木像 高一尺五分

131 獅子香爐 高二寸九分

青銅製鼻及臀部鍍金。

132 赤銅柄香爐 總長七寸七分 總高二寸七分

蓮華形

133 裝束念珠

水晶珠母珠及露玉赤銅蓮華唐草模様丸に二引兩紋透金具にて包みあ

134 水晶念珠

135 書棚 高二尺一寸、長二尺四寸

黒漆二階厨子上段丘陵老梅の高蒔繪中段唐人物下段香包の高蒔繪。

136 國寶住の江蒔繪硯箱 總高八寸二分、横七寸二分

三代家光將軍より天海大僧正の拜領せしもの住の江の濱の眞砂をふむたつは久しきあとをとむるなりけりの新古今賀部に出でし和歌を葦手書とせしものなり。

137 見臺 總高一尺九寸六分

黒漆櫻花の金蒔繪。

138 香道具

香盆金梨子地秋草蟲籠模様の蒔繪。

香合金梨地に松及粗孕の高蒔繪。

〔香箸〕灰押〔鶯〕銅製鍍金

香盆香合二點は三代將軍より賜はりしものなり。

139 陶器桃形筆洗 横四寸、縦二寸

桃實形貳個連接壹個半身にして筆洗用。

140 青銅牧童水滴 高二寸、長四寸

141 臘石朱塗縁衝立 總高一尺九寸四分、巾一尺五寸九分

中央臘石製樓閣の彫刻貼付。

142 重香箱

紀伊大納言東照神君より拜領の品寛永廿年奉納せられたるものなり。

(箱蓋裏墨書)

此二種切金香箱從權現様紀伊大納言殿拜領寛永二十載十月四日 被献之

143 蟲籠 高壘共六寸五分

籠竹製、臺黒漆、蔦唐草紋金蒔繪。

144 筆筒 長七寸二分

筒竹製筆二本入。

145 扇

一面金地唐人物鷹狩の圖彩畫、一面金地唐子遊戯の圖彩畫。

146 高麗版一切經

五百餘木の内もと東照宮輪藏に收納ありしものと傳へらるゝものなり。

大永年中當山權別當昌源大僧正高麗の印本を申請て奉納せしものゝ遺本と云ふ。

147 任僧正口宣案 横一尺五寸七分

慶長十六年三月廿七日付任僧正の宣旨。

148 轉任大僧正口宣案 横一尺六寸一分

元和二年三月廿七日付轉任大僧正の宣旨。

149 慈眼大師靈位經文三十品和歌 横一尺三寸二分

折本表紙紺地に竹及筍模様金欄慈眼大師三十三回延寶三年忌に寄せ給

へる明正上皇の御製を始め王公三十人の詠歌終に守澄法親王の跋文あり。

150 慈眼大師靈位經文三十品和歌 竪一尺四寸 横九寸四分

折木表紙濃茶地草花及鞆形模様綾慈眼大師百五十回寛政四年忌に寄せ給へる後櫻町天皇の御製を始め王公三十人の詠歌終に寛政四年百十年前天台座主公延法親王の跋文あり。

151 拂子 長一尺三寸

棕栝の纖維を以て作る。

152 鐵鉢 高四寸七分 口徑六寸五分

鎮子附屬。

153 鍍金舍利塔 總高六寸三分

寶珠水晶製舍利十九個在中。

154 請雨鈴 總高六寸四分

鈴白銅製把手五銖形大師雨請の祈禱の節所用と傳へらるゝものなり。

155 戒尺 長八寸二分

朱檀製。

156 貝多羅葉 長一尺八寸八分 巾一寸五分五厘

三葉照尊院惠海の奉納にかゝるものなり。

157 剃刀箱 長七寸五分

長方形金梨子地菊花蒔繪内部六區に仕切あり剃刀三挺在中。

158 白銅鏡 ⑤ 徑八寸一分

背面桐紋鑄出。

(銘)

天下一淨慶

159 犬形湯婆 ⑤ 長一尺六寸

銅製鍍金犬の踏狀を模したるもの左耳振卷開閉の仕組

160 藥奩 ⑤ 高一寸六分 徑五寸

形局平黒漆菊水の金蒔繪奩中に黒漆の藥壺七個在中。

161 藥籠 ⑤ 竪二寸六分 横二寸七分

黒漆印籠形銀製小箱四個在中。

162 木蘭地菱形紋紗法衣 ⑤ 丈四尺六寸

163 燕尾巾 ⑤

鼠地七寶唐花巴紋緞子。

共に元和二年二月後陽成天皇より賜はりしものなり。

164 赤地金龍紋金襴七條袷 ⑤

慶長十九年京都大佛供養用意の爲東照神君より賜はりしものなり。

(墨書)

此金龍袷者大僧正天海大佛供養爲用意慶長十九年征夷

大將軍家康公御手柄下給畢

寛永二十未歲十月初二日午上刻入寂

165 刺繡打敷 ⑤ 竪八尺一寸 横六尺四寸三分

白綸子孔雀鳳凰唐花模様の刺繡あり東照神君より賜はりしものなり。

(墨書)

征夷大將軍家康公

天海大僧正拜領

166 脇息 高八寸二分

唐桑製

167 沓 長九寸六分

船形表薄茶地雲形金網

168 同根竹杖 長三尺八寸八分

169 竹杖 長四尺二寸七分

吳竹製

共に後陽成天皇より賜はりしものなり。

第十四區

東照宮上神庫にある須彌壇を模し維摩居士木像并其他佛像佛具を陳列す。

170 維摩居士木像 總高三尺一寸

彩色玉眼の坐像もと東照宮上神庫須彌壇上に安置せられしものなり。

171 木造薬師佛像 高二尺八分

坐像黒漆の厨子中に納む日光山の開基勝道上人の作と傳へらるるものなり。

172 木造僧形立像 高四尺

中禪寺戒壇堂に安置ありしものなり。

173 木造男體神像 高一尺九寸五分

174 木造女體神像 高一尺八寸

共に中禪寺戒壇堂に安置ありしものなり。

175 眞言八祖畫像

八幅共にもと寂光に奉納せられたる古版木に依り新に摺刷たるもの、
一は康正元年「四百六十」二年前「一は應永三十三年「四百九」十年前「彫刻の銘あり。

176 黒漆四足案 高三尺二寸

177 三具足

青銅製萬治三年「二百五十」十月前田綱利の東照宮廟前に奉納せしものなり。
(燭燭臺銘)
奉納銅燭臺日光山

東照宮廣前

萬治三年十月十七日

加賀中將 菅原綱利

華瓶の銘燭臺に同じ

178 鬼童捧持燈爐 燈爐銅製鍍金八角形、高一尺一寸徑七寸五分
鬼童木彫高一尺、一ハ赤一ハ青ノ彩色

承應二年「二百六十」加賀爪直澄の大猷廟に奉納せるものなり。

179 曲录 總高三尺二寸

黒漆螺鈿蒔繪

(銘)「二百八十」

寛永拾貳歲

丙寅造

180 十王圖 竪三尺二寸三分
横一尺三寸七分

絹本彩畫慈眼大師御秘藏と傳へらる。

第十五區

主として開山勝道上人に關せるもの並東照宮創建以前の當山の狀態を徵證すべき遺品類を陳列す。

181 弘法大師撰勝道上人開山碑 横一尺七寸七分

銅版寶永二年「二百十三年前」輪王寺宮公辦法親王の御染筆に係るもと巨石に嵌し中宮祠境内二荒山登拜口にありしを神佛分離の際撤除せしものなり。

182 勅撰日光山御縁起 五卷之内

紙質烏の子裏金霞表紙藍地金欄見返金泥にて霞に水草の繪模様鍍金

183 錫杖 長四尺九寸

全部鐵製

184 木杖 長四尺七寸五分

185 二合刀子 總長一尺九分

共に勝道上人所用品と傳へらるゝものなり。

186 斧 全長三尺一寸
長五寸七分

斧鐵製猪目金銅覆輪柄木製黒漆金銅金具付傳へて勝道上人中禪寺立木觀音彫刻の際所用と傳へらるゝものなり。

唐草模様彫刻軸全篇二十七章日光開山以來の顛末を記す詞書首章は靈元上皇の宸筆其他は王公の筆挿畫筆者は狩野洞春。

187 國寶遠近作太刀 ① 又長二尺七寸

權少僧都信重男體山太郎明神に奉納せしものと傳へらるゝものなり。

188 國寶長船倫光作太刀 ① 又長四尺一寸五分

柄蒔黄糸巻鞘朱塗。

(銘)

備州長船倫光

貞治五年二月 日

189 國寶備前兼重作太刀 ① 又長三尺一寸

元祿十二年九月十日前藤原盛季の奉納品にかゝる。

(銘)

備州住兼重作

187 以下もと中宮祠に奉納せられしものなり。

190 國寶豐後行平作太刀 ① 又長二尺五寸六分

寛正二年六月前座禪院昌宣の奉納にかゝる。

柄鞘革巻。

(銘)

豐後國行平

191 國寶來國俊作太刀 ① 又長一尺八寸

柄葎巻鞘黒漆鐔四分一。

(銘)

來國 □

共に二荒山神社に奉納せられたるものなり。

192 古面 ①

何れも天文天正慶長年間二荒山神社本宮新宮并中宮祠に奉納せられ

しものなり。

193 古面

何れも足利末の昨昔時中禪寺に奉納せられしものなり。

194 割五鈷

金銅製二つに割れ中に白赤の佛舍利二個を納む慈覺大師の中禪寺に奉納せられしものと傳へらる。

195 八葉鏡

白銅製背紋雲鳳鏡面に佛像の毛彫あり慈覺大師の中禪寺に奉納したるものと傳へらる。

196 八菱鏡

銅製背紋双鳳唐草紋康正三年九百五十「妙義坊の奉納せしものにかゝる。

(銘)

康正三年 丑丁
奉施入妙義坊
正月十四日

197 湖州鏡

青銅製

(銘)

湖洲真正石
念二叔照子

198 金銅扇形宮

永正十七年「三百九十年前」菅谷前紀伊守紀孝勝の鳳凰尾を中禪寺へ奉納せ

しとき納めし筥

(銘)

日光山中善寺大権現

奉納御寶物鳳凰尾

于時永正十七年庚辰四月 日

菅谷前紀伊守紀孝勝 敬白

199 宋版觀自在菩薩坦噶喇隨心陀羅尼經 竪九寸

折本建長七年三月前「常州笠間の城主藤原時朝鹿島社に於て供養せし唐本一切經の一部明治二十六年千葉立造氏より輪王寺へ寄贈せられたるものにかゝる。

(奥書)

奉渡唐本一切經内

建長七年卯乙十一月九日於鹿島社送供養常州笠間前長門守從五位上藤原朝臣時朝

200 黒漆筥 竪一尺六分、横七寸八分

蓋共一寸七分

建長三年六月前「三月平時朝の奉納にかゝる。

(銘)

建長三辛亥三月

平時朝

201 春慶塗筥 竪一尺二寸一分、横六寸七分

蓋共六寸一分

應永六年八月前「金剛佛子貞禪中禪寺へ日本紀三卷麗氣記十八卷神系圖一卷奉納せしとき用ゐし筥なり。

(銘)

蓋表

敬奉施入中禪寺權現御寶前

筥身

并麗氣記十八卷納

日本紀三卷

次神系圖一卷

施主金剛佛子貞禪

應永第六林鐘一日

敬書

202 天神御影 ① 總長四尺三寸、總巾一尺四寸五分

中禪寺寶物。

背書

元祿十五壬午年從御本房新規表具之

203 華嚴經 ① 卷第廿二

紺紙金泥卷首に兜率天宮の密畫及左の文字を記す。

榮祿大夫權政使領掌謁卿領延慶司事臣鄭禿滿達兒竊念荷父母訓育之德

皇帝

皇太后舍人太子眷遇之恩獲事

兩宮位階一品永懷罔極徒感寸誠於是金字書寫

佛華嚴經一部凡八十一卷首榜嚴經一部十卷

爰仗佛乘祈

天永命伏願乾坤比於覆燾日月茲於照臨家國咸寧人神均慶
元統二年五月日謹誌

箱春慶塗にして表に

金字華嚴經第五會說佛像在之
施入比丘禪格加修理當座重範

箱裏に

康安元年南呂十一日

元統二年は我後醍醐天皇の建武元年(五百七十)康安元年(五百四十)はこれに後るゝこと二十八年なり。

204 壺 ① 高一尺一寸二分
腹徑一尺一寸

陶製肩部玉の刻字あり明治十年八月二荒山山上奥社裏より掘出せるもの。

205 國寶銅碗 ① 高一寸五分五厘
徑五寸五分五厘

延元元年比丘道賢中禪寺妙見堂に奉納せしものなり銘文中世當今皇帝還城再位とあるは延元元年正月廿七日後醍醐天皇叡山より還御ありしを申すものにして又預聞以後醍醐院自號焉これによつて天皇は親ら後醍醐院と申され給ひしを知らる想ふに天皇は御代を王朝の盛時延喜天皇天曆天皇の御代の如くに御復し給はんとの御考より第二の醍醐天皇を以て任じ給へる事此の銘文によりて察し奉らるゝ貴重の史料なり。

〔銘〕「五百八十一年前」

奉施入子
日光山中禪寺
妙見大菩薩
御寶前御器
一具十枚
年延元元丙子

六月晦日
世
當今皇帝
還城再位預
聞以
後醍醐院自
號焉
當上人大現
大工彦三郎入道
施主比丘道賢
爲傳於不朽
自筆耳

206

國寶紺地金泥般若心經 長二尺五寸五分 八寸六分

應永十三年足利滿兼書寫奉納にかゝるものなり。

(奥書) 應永十三年十一月十二日

左兵衛督源朝臣滿兼花押

207 儀式用大工道具

鉞 長二尺七分 曲尺 長一尺四寸四分 墨壺 長七寸四分

208 三鈷柄劍 長二尺四寸四分

209 劍 長一尺九寸二分

鞘銘

施人寶藏坊昌仲

210 清綱作太刀鞘 長二尺七寸八分

黒皮包

211 太刀拵

一は金無地二は黒皮包

柄覆輪金具毛彫銘

奉施入中禪寺御寶殿御劔一腰佐野安房兵衛次郎藤原氏綱

當聖人慈性坊良海

建治二年卯月廿二日

212 明誥命殘缺 長二尺三寸一分 巾一尺

昔時支那朝廷に於て用ゐし勅書卷首に必ず「奉天誥命」の文字を織出しあり。

(背面)「永祿九年 四百五十二年前」

永祿九年丙子五月七日

奉進納本宮御寶前施主糟尾神山十郎兵衛敬白

213 納經塔 高八寸二分 方五寸二分

鐵鑄元徳三年「五百八十年」良覺上人中禪寺上野島に建てられしものなり。

(銘)

「一字三禮如法書寫一乘妙典全部奉納」

「本願聖人良覺」

「元德三年未十二月十五日」

「大工沙彌 行西」

214 磬 ● 長五寸二分 中二寸二分

銅製建保五年(七前百一)淨智房猷宣の中禪寺に奉納せしもの一面に陀羅尼文刻出しあり。

(銘)

奉施入

男體權現

建保五年丁

六月 日

金剛佛子

淨智房 猷宣 生年

六十三

大工藤原

兼則

215 鰐口 ● 長五寸一分 横六寸一分

銅製應仁二年圓實坊昌藝中禪寺に奉納せしものにかゝる。
(銘) 「應仁二年四月十四年前」

奉施入鰐口一敬白大旦那九次良中禪寺内千手蓮花石住人

當上人圓實坊昌藝

應仁二年乙六月十八日

216 鰐口 ● 長八寸五分 横九寸一分

銅製應永二十年甲城肥後入道新宮權現に奉納せしものにかゝる。

(銘)

「應永二十年
五百五十年前」

奉施入日光山新宮權現

于時應永二十年癸巳九月十八日甲城肥後入道道口

217 狛犬^{こまいぬ} ⊖ 高一寸九分

青銅製

218 正一位日光大權現額^{しょういちゐにちくくわうだいこんけんがく} ⊖

文字行體銅製鍍金享保十年「百九十年前」公寛法親王の御染筆に係る。

219 男體權現額^{おんなたいこんけんがく} ⊖ 長三尺一寸

公啓法親王御染筆。

220 太刀拵^{たちしほ} ⊖ 總長四尺三寸八分

(銘)

「慶長十一年
二百五十年前」

慶長十一年丁未九月持主鉢口村源兵衛奉修理本宮御刀金子伊勢守

221 彌々切丸太刀^{やゑゑきまるたち} ⊖ 全長一丈一尺二寸五分

222 瀬昇太刀^{せのぼるとち} ⊖ 又長四尺二寸四分

刃面に稻妻及俱梨伽羅不動の彫刻あり。

223 柏太刀^{かしはのたち} ⊖ 又長四尺六寸二分

小田平塚入道の新宮に奉納せられしものにかゝる。
(銘)

日光山奉納新宮御寶前上毛國小田平塚入道

224 尾張太刀^{おわりたち} ⊖ 又長二尺五寸二分

切先兩刃。

共に足利時代の作にして二荒山神社本宮及新宮に奉納せられしものなり。

225 太刀 又長二尺四寸八分

元禄十三年「二百十」六年前「鈴木長頼新宮に奉納せられしものにかゝる。

(銘)

奉納 行年八十二作

野州日光山新宮御寶殿 鈴木修理總積長頼

元禄庚辰仲春二十八日

願成就 相州住 伊勢大椽源綱廣

226 阿彌陀佛畫像 掛物總長五尺二寸九分
もと新宮に奉安せられしものなり。

227 釣香爐 高三寸二分

銅製鍍金延寶三年「二百四十」照尊院全海の「新宮に奉納せしものにかゝる。

228 佛具

銅製鍍金弘法大師の所用品にして道珍僧都に授けしものと云ひ傳ふ。

229 國寶紙本墨書日光山瀧尾建立草創日記 長七尺五寸一分

天長二年「千八十」四月道珍僧都の撰文にして瀧尾社開創の始末を記す瀧尾社別所に傳へられしもの應永年間出羽國龍赤寺に持ち行かれしか永享八年亦瀧尾社に返還せられ以て今日に及ぶ。

230 國寶蒔繪手筥 總高一尺七寸三分 横八寸四分

黒漆住吉浦之圖蒔繪安貞二年「六百八」十九年前「正月平助永瀧尾社に奉納せ

しものなり。

(銘)

奉施入

女體權現御寶前手筥一
安貞二年戊子正月晦日平助永

231 倭鏡 〇 徑六寸七分

鋼製圓鏡背紋鶴蓬萊山

康安元年「五百五十五」宮光より瀧尾に奉納せしものなり。
(銘)

奉施入

瀧尾

神鏡

宮光

庚安元八廿八

232 石劍 〇 長一尺六寸二分

粘板岩製

233 石鈷 〇

粘板岩製

共に昔時二荒山神社新宮に奉納せられしものなり。

234 和漢朗詠集下 〇 長五丈三尺八寸
堅六寸五分

卷物聖護院道興准三宮の筆天文九年「三百七十八年前」前大僧正の奥書あり。
(奥書)

此兩卷老師道興准三宮遺筆也

感□□加愚墨訖

天文第九之曆始浣下五

前大僧正花押

235 蒔繪手箱 〇 高六寸四分、巾八寸六分
長一尺八分

金梨子地鐵線唐草模樣丸に三引兩の蒔繪文政八年「九十一
觀音院亮
覺の瀧尾に奉納せしものにかゝる。

236 女體中宮額 〇 總長三尺八寸五分
總巾二尺三寸

木彫弘法大師の筆と傳へらる。

237 女體中宮額 〇 總長三尺三寸二分
總巾一尺六寸二分

木彫

238 軍茶利王畫像 〇 總長六尺六寸七分
總巾二尺六寸七分

絹本着色

239 不動明王畫像 〇 總長六尺三寸二分
總巾二尺六寸二分

絹本着色

共に瀧尾社に奉安せられしものなり

240 經筒 〇 高八寸九分
徑四寸

銅製鍍金朱寫法華經八軸在中。

(筒銘)「享保二十一年前」

日光山

瀧尾大權現廣前

如法經

享保二十歲次乙卯孟秋吉日

141 舍利塔厨子高四寸三分、

方形木製黒漆永正四年「四百九十九年前」光泉坊慶海の瀧尾に奉納せしものにか
ゝる。

背面銘

奉施人 御舍利五粒玉塔一字
瀧尾御寶前 願以此功德

當御留守座禪院昌顯

永正四天丁卯六月十八日

施主 光泉坊慶海

取次 昌顯花押

242 倭鏡

○ (一) 徑六寸九分
○ (二) 徑四寸九分

一 白銅製背紋雙鳥柳水陸紋龜鈕、二 白銅製柄鏡背紋鶴龜松竹

二ノ銘 天下藤原光長

243 倭鏡

○ (一) 徑二寸八分
○ (二) 徑五寸九分五厘

一 銅製柄鏡背紋靴形、二 白銅製柄鏡背紋南天

二ノ銘 天下一尾河吉定作

244 倭鏡

○ 二寸六分乃至三寸八分

一 白銅製圓鏡背紋雙鶴菊花紋散龜鈕
二 銅製八葉背紋瑞花雙鳥紋

三 銅製圓鏡背紋雙雀蓬萊山紋龜鈕

四 銅製圓鏡背紋雙鳥松竹岩水筏紋

五 銅製圓鏡背紋松樹水流紋龜鈕

六 白銅製圓鏡背紋三巴

六を除く他は何れも足利時代の作

245 倭鏡

足利末及徳川時代の作にして何れも瀧尾に奉納せられたるものなり。

246 後撰和歌集

○ 寫本粘葉卷末に天海大僧正の奥書あり。

247 錫杖

正應元年八百廿「十一月沙彌生阿の瀧尾に奉納せしものにかゝる。

(銘)

奉施入
日光山
女體權現
御寶前
正應元年戊子
十一月日沙彌
生阿

248 圓鏡 徑五寸八分

銅製倭鏡背紋龜雙鳥松竹梅

249 倭鏡 徑五寸六分

銅製圓鏡背紋蝶鳥嘉慶元年五月三十日
嘉慶元年丁卯十二月一日
久昌より新宮に奉納せしものにか
ゝる。

(銘)

奉施入

新宮權現御寶前

嘉慶元年丁卯十二月一日

月南坊昌久

250 倭鏡 徑四寸九分

銅製長方鏡背紋雙雁

251 倭鏡 徑四寸

銅製方鏡瑞花雙鳥

252 倭鏡 徑三寸四分

銅製方鏡背紋桐鳳凰

253 黒漆手箱 高七寸三分 長一尺一寸二分

鍍金小碗以下髮道具十點在中。

254 鍍金銅板張三重塔 高一尺三寸六分

255 松蟲鈴 高五寸一分

萬治三年「二百五十」櫻本坊祐松寂光に奉納せしものなり。

256 法華經箱 高二寸六分

承應三年「二百六十」鏡觀坊天能寂光に奉納せしものなり。

257 金梨子地經箱 高二寸二分

寛永九年「二百八十」九鬼長門守寂光に奉納せしものなり。

258 手箱 縦一尺一寸九分 高八寸三分

黒漆の上に朱漆にて蓋及箱四圍に竹虎梅竹小鳥牡丹唐獅子等の模様

を描く享祿三年(三百八十)宥海並性清兩人より寂光御内陣に奉納せしものにかゝる。

(蓋裏銘)

奉新造寂光寺權現

御内陣御手箱一字

本願主宥海并小聖性清

享祿三天 庚寅四月三日

259 小箱 ㊦

もと258の手箱に納められたるものなり。

260 經箱 ㊦ 高三寸八分 巾一寸五分

黒漆寶徳二年「四百六十」當上人秀雅寂光に奉納せしものにかゝる。

(箱裏銘)

奉施入新造經籙良海
寂光寺當上人秀雅
寶德仁年三月三日

身二

仲音坊
道智上人書寫

261 法華經箱 高一寸八分 巾二寸二分

朱檀製象牙にて梅花模様の象嵌262の法華經の箱なり。

(蓋裏銘)「天文十五年三月八十年前」

寂光寺御内陣
(箱身銘)

奉施入法華經一部
寂光寺御殿
遊城坊綱範
右意趣者二

262 法華經 世爲成就也
天文十五年丙六月日

版本
横一 寸四分

(奥書)

奉施入寂光寺御内陣
天文十五年丙六月日
右意趣者爲悉地成就也

遊城坊綱範

263 木塔 總高八寸

寶德年間祐觀坊の寂光に奉納せしものにかゝる。
(銘)

奉施入日光山
寂光寺御寶塔

寶徳□□九月一日
當聖人長音坊

(台銘)

願主祐觀坊
□ □

264 國寶紺紙金泥阿彌陀經 中長八尺七寸五分

この宸翰阿彌陀經は櫻町天皇が先帝中御門天皇の七回の御忌に當り先帝嘗てその經題を書寫し給へるものゝ本文を書繼ぎ給ひて其冥福を祈らせ給へるもの當山第五世輪王寺宮公遵法親王は櫻町天皇の皇弟に當らせ給へるを以て特に下し賜はりしものもと寂光常念佛堂に傳へられたるものなり。

(奥書)「寛保三年百七十四年前」

今茲丁先帝七回御忌先帝嘗親書阿彌陀經之標識今朕新書

本經以新冥福云

寛保三年四月十一日

大日本國天子 昭 仁 謹書

265 懸佛

大小拾壹個銅製圓形
附屬曲物の底面に

寛永四丁卯六月 日

瀧尾御寶前

法門坊

當上人 昌 盛

266 古硯 徑六寸五分五厘

丸形粘板岩製

267 古面

天狗面以下十一面取付。

268 錫杖 長一尺三寸六分

銅製寶徳二年「四百六十
慶春坊守乘及び康正元年「四百六十
年前」西本坊昌宣
奉納の銘あり。

269 古硯 長九寸四分

琴形粘板岩製妙儀算盤の常行堂に奉納せしものにかゝる。

270 古硯 長八寸

長方形端溪天正十九年「三百二十
年前」法印昌存常行堂に奉納せしものにか
かる。

(箱蓋銘)

日光山常行堂寶物

施入唐硯道義坊法印昌存

天正十九年卯辛八月吉日

271 古硯 徑六寸二分

四つ花形粘板岩製永正十年「四百三
十年前」坐禪院昌顯常行堂に奉納せしものにかゝる。

(銘)

施入常行堂座禪院昌顯

永正十
ト癸
リ

272 國寶錫杖

平治年間の作中禪寺座主秀海より常行堂に奉納せられたるものにか
かる。

(銘)

願主秀海

常行堂

半王
深

273 猿面硯 長五寸七分

陶製縁黒漆櫻花流水金蒔繪

274 千手觀音坐像

銅製

275 懸佛

銅製鍍金馬頭觀音像打出

276 小塔

鍍金「銘心海」

277 千手觀音坐像

青銅製鑄物

第十六區

278 延年舞

東照宮例祭の日三佛堂前に於て行はるゝもの舞人二人一人は赤地牡丹唐草模様緞子の袍を着し大口を穿ち五條の袷裳を以て頭を裏む一人は同装立烏帽子を被り共に蝦鞘巻絞柄放目貫の短刀を帯び中啓を唱ふ此間咒頌方僧數人後方にありて舞頌を唱ふ。

第十七區

維新前當山堂坊配置の地圖を掲げ木戸孝允の書翰を陳列す。

279 日光山繪圖

明治維新前當山に於て版行せし繪圖の一なり。

280 木戸孝允消息 長四尺一寸七分 堅五寸四分

この書翰は木戸孝允氏が明治の初年東北巡幸供奉の砌登晃當時この地の社堂も神佛分離の影響を蒙り居るを目撃せられ就中三佛堂の破壊せられ居るを實見し其の保存を唱導せられたるもの舊圖と對照せられなばその先見の深を想はるべし。

第十八區 參考室

平素は主として徳川歴代將軍の筆蹟及び幕府編纂の書籍等を陳列す。

281 台徳院將軍二代秀忠筆いろは歌 掛物

明治廿五年千葉立造氏寄附

282 台徳院筆天滿大自在天神號 掛物

明治十六年徳川家達公寄附

283 嚴有院將軍四代家綱筆墨畫袋圖 掛物

明治廿七年千葉立造氏寄附

284 嚴有院筆和歌 掛物

明治十六年六月徳川家達公寄附

水の面にてる月なみをかそふれば
こよひで秋の最中なりける

(源 順)

285 常憲院將軍五代綱吉筆觀用教戒 掛物

明治十六年六月徳川家達公寄附

釋迦孔子之道專慈悲要仁愛
勸善懲惡眞若車兩輪最可篤
恭敬者也然學佛道者泥經錄
之說離君遺親出家遁世而欲

得其道如此則世將至悉亂五
倫是可恐之甚也學儒道者泥
經傳之言祭或常食用禽獸是
以不厭害萬物之生如此則世
將至悉不仁而如夷狄之風俗
是可恐之甚也學儒佛者不可
失其本矣

內大臣 綱吉 朱印

286 常憲院筆蓮花圖 掛物

明治廿一年一月岡宗益氏奉納

287 文昭院筆蹟 掛物

明治十六年七月德川家達公寄附
山人虎松丸九歲

288 文昭院筆和歌 掛物

明治十六年德川家達公寄附

十八公榮霜後露
一千年色雪中深

ときはなる

松のみとりも

春くれは

今ひとしほの

色まさり

けり

289 有徳院筆井出玉川圖 掛物

彩畫俊成卿の駒とめて云々の歌意を描きたるものなり。

290 有徳院筆雪月花三字 掛物

明治十六年六月德川家達公寄附

291 淳信院筆注連鶯圖 掛物

九代家重

彩畫明治十六年七月徳川家達公寄附

292 凌明院將軍十代家治筆墨畫羅漢圖 掛物

〔雪舟筆意〕とあり明治十六年七月徳川家達公寄附

293 文恭院將軍十一代家齊筆壽善二大字 掛物

明治十六年徳川家達公寄附

294 慎徳院將軍十二代家慶筆月雁圖 掛物

明治十六年六月徳川家達公寄附

295 昭徳院將軍十四代家茂筆尙立二大字 掛物

明治十九年九月陸奥宗光氏寄附

296 徳川慶喜公筆五言詩 掛物

明治十九年澁澤榮一氏寄附

清霜醉江樹 滿月蔭蘆花

297 寛永諸系圖傳 百八十六册之内

寛永十八年〔二百八十
二年前〕太田資宗及林道春同春齋等撰録し淨書の一
本を東照宮に納めしものなり。

298 寛政重修諸家譜 千五百二十册之内

堀田正敦等の編纂寛政十二年より文政九年〔百六
年前〕に至りて成り淨書
の一本を東照宮に納めしものなり。

299 徳川御實記 五百十六册之内

文化六年林衡總裁の下に成島司直等の編述にかゝる嘉永二年〔七十
年前〕に至りて成る亦幕府の献上本なり。

300 大日本史 二百七十六册之内

水戸徳川家の献上本なり。

301 御書院番分限帳

302 月番帳

文久二年八月より文久三年十二月迄の奥醫師月番の事項を記したるものなり。

共に明治廿年岡宗益氏の奉納にかゝる。

303 東照神君御畫像 掛物

彩畫大正四年十月宮本央氏より奉納せるものにかゝる。

背書

文政七年申歲四月

304 東照神君御畫像 掛物

凌雲院現住大僧正深信開眼

大正四年六月草刈豊太郎氏より奉納せるものにかゝる。

305 道春日光山記 幅一尺三寸一寸

林道春自筆日光山紀行の草稿にして當時の景況を見るに足るものなり。

明治廿五年伯爵勝安房氏より道春の裔孫林昇氏に贈りたるを更に同氏より東照宮に奉納せしものにかゝる。

306 狩野常信筆東照宮御祭禮繪卷

卷物紙本彩畫

(奥書)

日光拜ス

307

松華堂筆宗祇畫像

總丈三尺八寸五分

紙本墨畫 落款松華

御祭禮行列圖藤原常信畫之誌印

308

宗玩筆雲門二字

總丈三尺七寸二分

紙本 落款

目求書

遠孫毘丘

宗玩 □ □

(六〇一)

大正六年八月十五日印刷
大正六年八月二十日發行

定價金十五錢

發行者兼

日光寶物館

右代表者 栃木縣日光町 日光寶物館內
古 谷 清

印刷者 東京市本郷區湯島四丁目五番地
神社協會出版部

右代表者 石 井 清

不許複製

21
3451

終

